様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　８ 月 １８ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2020
課題番号：１５Ｋ０２２９４

研究課題名（和文）17世紀イギリス詩における回覧文化と出版文化

研究課題名（英文）Manuscript Culture and Print Culture in 17th-century English Poetry

研究代表者
松崎　毅（Matsuzaki, Takeshi）

お茶の水女子大学・基幹研究院・教授

研究者番号：４０１９０４４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：17世紀のイギリスには、詩を手稿のかたちで回覧する回覧文化と、本として出版する出版文化が共存していた。本研究は、第１に、17世紀前半に盛んに作成された「手稿詩集成」の実態を明らかにするとともに、王党派詩人キャサリン・フィリップスの文学サークルと回覧文化の在り方を調査した。第２に、アンドルー・マーヴェルの政治詩の手稿版と印刷版を比較し、回覧文化と出版文化の特質の差異を考察した。第３に、楽曲にのせて歌われる詩を宮廷的文学伝統に属する回覧文化の一部と位置づけ、音楽家ヘンリー・ローズが共和制期にも開催し続けた音楽サロンが宮廷的文学文化の継続にどのように寄与したかを考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、17世紀の前半におけるイギリス詩の多くが、特定の、あるいは限られた一部の読者を想定して書かれていた事実を明らかにし、それらが不特定多数の読者を想定して出版される詩とは異なる詩的特質を持つという論点を追及したものである。回覧文化における詩は、具体的に顔を思い浮かべることのできる少なくとも幾人かの読み手あるいは聴き手を想定して書かれ、それゆえ、詩人と読者ないし聴衆にしか分からない共有された文脈を内包している。回覧文化の位相に属する詩を真に理解するには、この想定される読者（implied reader）の同定が、従来思われていた以上に重要であるという論点を本論は提起した。

研究成果の概要（英文）：In 17th-century England, there existed both manuscript culture characterized by manuscript circulation of poetry and print culture characterized by its publication as a book. First, this study surveyed how so many of manuscript verse miscellanies were compiled from 1620 to 1640, and then how Katherine Philips, a royalist poet, managed her literary circle and of what members her circle consisted. Second, I considered differences between manuscript culture and print culture by comparing the manuscript and print versions of one of Andrew Marvell's political poems. Third, considering poetry sung with music as part of manuscript culture that originates in courtly literary tradition, I examined how Henry Lawes's music salon held in the Interregnum contributed to survival of the courtly literary culture.

研究分野：イギリス詩

キーワード：出版　手稿　回覧　イギリス　詩　歌　17世紀

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）これまで 17 世紀のイギリス詩における隠蔽性という問題を、検閲や文学ジャンルとの関係において研究してきた。その過程で、特に内乱期の王党派詩においては、作品の流布が、大抵の場合出版ではなく手稿の回覧によってなされていた点に着目し、手稿の回覧と出版における読者の想定（implied reader）の違いが、言語の隠蔽性を含む詩の言語の特質にどのような影響を与えるかに興味を持った。

（２）加えて、詩の政治性という点に着目したとき、特定の読者を想定する手稿の回覧と不特定多数の読者を想定する出版では、その政治性の意味合いが異なるはずだという仮説を立て、回覧文化から出版文化への移行において、詩の政治性がどのように変化していったかを検証する必要性を感じていた。

２．研究の目的

（１）手稿の回覧が 17 世紀中期においても依然行われていたことは分かるとしても、それが具体的にどのようなルートと形態で、またどのような人にどれだけの規模で行われたかは不明な点が多い。そこで、この回覧文化の実態をより明らかにすることを第一の目的とした。

（２）次に、手稿の回覧における読者の想定と出版におけるそれの違いが詩の言語にどのような差異を生み出しているか、また、詩の政治性の意味合いが回覧文化と出版文化のあいだでどのように変化したかを具体的な作品を対象に分析することが必要であり、これを第二の目的とした。

（３）（２）の研究過程において、手稿の回覧と同様、ごく限られた相手を聴衆として想定した「歌われる詩」と、その文学／音楽サークルの活動が同時代に補完的な役割を果たしていたことに注目し、特に王党派の文学サークルと音楽サークルの関連性を調べる必要性を感じ、これを第三の研究目標に加えた。

３．研究の方法

（１）手稿の回覧をテクストの流通手段とする文学文化については先行研究がすでにいくつかあるため、まずこれらの研究書に当たった。また、現代に編纂された 17 世紀詩のテクストにおいても、編纂過程を示す本文批評のなかに、現存する 17 世紀の手稿についての情報が多く含まれているため、これらを参考とした。これらは書籍を通じた研究手段である。

（２）手稿として流通した詩のテクストとの比較対照のため、17 世紀に出版された詩のテクストが必要になるが、これらは英国図書館から電子媒体で取り寄せるほか、本学で購入した Early English Books Online のデータベースを活用した。これらは個々の作品の手稿版と印刷版を比較するうえで有効であるとともに、詩集に寄せられた推奨詩に当時の詩人たちの交流関係を示す情報が多く含まれるため、回覧文化の実態を調査するうえでも有効であった。

（３）作者自身の手になる手稿は散逸していることがほとんどであるが、流通したと思われる手稿の写しが、様々な場所にやはり手稿として残っている。これらはデータベースや電子媒体でも入手が困難であるため、それらが所蔵されている英国の図書館に実際に赴き、資料収集を行った。

４．研究成果

（１）手稿文化あるいは回覧文化の実態は、それがすでに歴史的に失われているものであるため、現存するさまざまなテクストから想像により再構成していくことでしか明らかにならない。先行研究においてもそれは同様であるが、まず先行研究によって確認できたことは、手稿と出版物の持つステイタスが、少なくとも 17 世紀の前半、特に王党派の詩人たちにとっては、現代の我々が想起するものの逆であり、手稿は印刷のための一時的な「原稿」ではなくむしろ作品そのものであり、出版物は作品そのものの便宜的な「写し」と捉えられていたことである。J. W. Saunders の「出版の恥辱（stigma of print）」（Wilcher 255）という言葉が端的に示しているように、16 世紀から 17 世紀前半において、詩を出版することは、名誉などではなく、詩作がもつ文化的（そして階級的）優越性を自ら否定する行為でありえた。詩人は自ら筆記した手稿、あるいはその複数の手書き写本を、その文学上のパトロンや政治的影響力を持つ人物、詩人仲間、友人、家族等に配り、受け取った者たちはそれを書写し、あるいは書写させて保存した。読むだけの者もいたが、その写本はまた別の者の手に渡り、それがまた新たな写本を生み、そうして写本は詩人と直接・間接に親交のある人々、また親交はなくとも詩を愛好し収集する人々のあいだに徐々に広まり読まれていった。H. R. Woudhuysen は、詩におけるそのような manuscript culture の実態を論じているが（153-173）、彼によれば、詩を受け取った者がそれを書写して残す手稿詩集成（manuscript verse miscellany）は、1620 年代から 1640 年代にかけて数多く作られ（158）、たとえば John Donne の詩を含むこの時代の主要な集成だけで、少なくとも 73 以上のそれが存在したという（155）。一方、ダンの詩集の出版はその死後のことである。詩は、それ

を読むだけの教養と嗜好、そしてある程度の身分を持つ人々に対し基本的にプライベートなかたちで回覧されたのであり、出版物として大量生産し、「市場に売りに行く」（Wilcher 255）ような類のものではなかった。そしてこの価値観は、生前すでに詩集を出版していた Ben Jonson においてもおそらく同様であった。彼にとっても、「詩を書くことの愉悦の一部は、それがすぐさま手稿のかたちで回覧され、ほぼ時を置かずに収集家の注目の的になること、つまり人々がそれを書写させてほしいと懇願するのを想い描くことにあった」のである（Woudhuysen 153）。

（２）さらに、本研究では、回覧文化が 17 世紀の内乱期・共和政期において、どのような人々により継承され、それがどのような政治的・文化的意味を持ったのかを検証した。1649 年の国王チャールズI世の処刑は、当然宮廷とそこで培われていた文学文化のイギリスにおける消滅を意味した。しかし、敗北した王党派およびチャールズの庇護の許にあった詩人たちは、さまざまなかたちで宮廷の文学文化を維持存続させ、ピューリタンたちの禁欲的宗教文化に対抗しようと試みた。手稿の回覧が地下潜伏したことは容易に想像されるが、その流通についての詳細な相関関係は、直接的な資料が乏しく、推測の域を出ない。ただ、皮肉なことであるが、1640 年代に急速に発達した出版文化が、思いがけぬ仕方でその手掛かりを与えてくれている。たとえば、この時期、王党派詩人たちの詩集出版に精力的に取り組み始めた出版者 Humphrey Moseley は、内乱時チャールズに同行してオックスフォードに赴きそこで病死した聖職者・詩人・劇作家 William Cartwright の著作集を 1651 年に出版したが、この本には 54 編の推奨詩（commendatory poems）が収められており、その中には、Cartwright との直接の交流を窺わせる内容のものが含まれる。ただ、この 54 編という異例な数の推奨詩は、この出版物が、チャールズが処刑されオリバー・クロムウェルが共和制の地歩を固めつつあった時期に、王政主義のイデオロギーがいまだ健在であることを誇示する強い政治的意図をもって制作されたことを暗示する。ただ、出版の経緯を考えると、ここに名を連ねた人物たちがそのまま一つの文学サークルを形成していたとは考えにくい。彼らの多くは依然として手稿の回覧を詩の公表の主要な手段としていたが、この Cartwright の推奨詩には恐らく、宮廷だけでなく、複数の多様な文人サークルが関わっており、それらは王政主義のイデオロギーにおいて部分的に重なり合いながらも、さまざまな条件（階級的、血縁的、教育的、地域的な背景）によって独自に形成されていたと考えられる。このため、本研究では次に、宮廷からある程度の距離を置きつつ独自の文学サークルを作り活動した Katherine Philips に焦点を当てた。

Katherine Philips はロンドンの比較的裕福な商家の出身であるが、チャールズI世とその王妃ヘンリエッタ・マリアの宮廷文化の洗練を受け継いだ詩作品により、男女を問わず共和制期と王政復古期の詩人たちから Matchless Orinda の名で称賛された。詩集の出版は没後３年の 1667 年で、存命中は作品の大半が手稿の回覧によって読まれたことになる。本研究では彼女の手稿を目にした可能性のある人々の範囲を伝記的資料と作品そのものから調査した。彼女の作り上げた文学サークルは Society of Friendship と名付けられ、内乱勃発以前に王妃の影響下に宮廷で流行し、仮面劇や歌曲により表現されたプラトニックな友愛の理念を具現化するもので、そのメンバーも大半が王政主義者であった。ただ、潜在的に彼女の手稿を目にした可能性のある人々の範囲は実はかなり広かったと思われる。まず、血縁的には、彼女の母親は高名なピューリタン説教師 John Oxenbridge の妹であり、この Oxenbridge は Andrew Marvell や John Milton の友人であった。加えて、彼女の母方の祖母は、John Aubrey によれば、その寓意画集や聖人伝で人気を博した Francis Quarles と知り合いで、自ら詩作も行っていた。また、Quarles は Anthony à Wood によると「明らかにピューリタン」であった（Thomas 2）。つまり血縁的には彼女は元々強くピューリタンの流れを汲む文人だったのである。一方、彼女は８歳になると母親の宗教信条に従い、長老派の Mrs Salmon が経営する寄宿学校に行かされたが、その学校は裕福な中産階級の子女を集めて上流階級に嫁ぐに相応しい文学・音楽その他の教養を授ける女子学校であり、彼女はそこで James Shirley, Cartwright, Baumont and Fletcher などの王党派の詩や戯曲に親しむとともに、ウェールズの王党派 John Aubrey の娘 Mary Aubrey や血液循環の発見者である科学者 William Havey の姪 Mary Harvey と親しくなった。また、この Mary Havey はその後、王党派の貴族 Sir Edward Dering に嫁いだが、彼女は宮廷音楽家で共和制期に入ってからも王党派の詩人や貴族を集めて音楽サロンを開催した Henry Lawes に音楽の個人教授を受けることになった。Patrick Thomas は、Philips がおそらく極めて親しかった彼女を通じてロンドンの王党派文人サークルに加わることになったと推測している（3-10）。さらに、彼女は 1648 年にウェールズの議会派の政治家 James Philips に嫁いだが、夫の政治的立場とは無関係に、その地でも John Aubrey, John Jeffreys, Henry Vaughan などのウェールズの王党派人脈と関係を深めていった。こうして Philips はロンドンとウェールズの双方に王党派人脈を築き、その Society of Friendship を広げていったのである。

象徴的な点は、彼女がその政治信条において敵対すると言ってもよい夫の James を彼女のサークルの一員とし、Antenor という coterie name さえ与えていたことである。彼女は王党派の文人たちの中でも一目置かれ、Cartwright の作品集にも K.P.の名で推奨詩を寄せており、実際ときに痛烈なピューリタン批判と王政主義擁護の言説をその詩の中で繰り広げている。ただし、その文学サークルが目指していたものは、少なくとも表向きにはプラトニックな友愛関係の追及であり、かつて存在した宮廷的文学文化の継承であった。つまり、王党派としての彼女の文学活動は政治イデオロギーとはまた異なる文化イデオロギーとも呼ぶべきベクトルを持っており、

その意味においては政治的に敵対する立場の文人をも取り込む可能性を孕んでいたと言える。たとえば、Andrew Marvell の代表作の一つ"The Garden"の冒頭には Philips の影響が見受けられ、近年の研究ではその創作年を Philips の詩集出版後の 1668 年とする説が有力であるが（Smith 152）、それは必ずしも Marvell が Philips の作品をより早い時期に手稿で目にしていなかったことの証明にはならない。その意味では、17 世紀の様々な文学サークルが、その政治イデオロギーによって明確に分断され、相互の交流が殆どなかったという思い込みには再考の必要がある。ただ、この論点を追及するには、宮廷の文学文化の継承に対して補完的な役割を果たしたと思われる「歌われるもの」としての詩とその推進役であった音楽家 Henry Lawes の活動の考察が必須と考えられる。このため、この研究成果の公表は一時保留し、Henry Lawes を中心とした音楽サークルの研究を行ったうえで改めてその成果をまとめることとした。

（３）次に、本研究では、回覧文化と出版文化における読者（implied reader）の違いが、詩にどのような形質の違いを生み出しているかを Andrew Marvell の"An Horatian Ode upon Cromwell's Return from Ireland"（以下 Ode と略記）を一例として明らかにした。この詩は 1650 年に執筆され手稿のかたちで回覧されたが、出版は 1681 年になった作品である。内乱末期に王党派文人のサークルに属していたと見られる Marvell は、1650 年、この詩により突如オリバー・クロムウェルとその共和制への支持を明らかにし、その後、共和政体の中枢である国家評議会に書記官としての地位を得る。国王チャールズI世処刑の翌年になされた明らかな政治的変節とも解しうるが、この Ode は、クロムウェルの行動力を称え、共和政体への移行を必然と説きながら、同時に処刑に臨んだ国王の高潔な態度、あるいはクロムウェルに対する皮肉ないし脅しともとれる詩行が交錯する極めてアンビバレントな作品である。比較分析の対象としたのは 1650 年に回覧されたオリジナルに最も近いと思われる手稿写本（Oxford 大学所蔵、MS Eng. Poet. d. 49）と、1681 年に出版された *Miscellaneous Poems*（115-118）に収められている同作品である。この二つのテクストを、詩形と語彙、句読法、大文字の使用（capitalization）等の観点から比較し、形態上の違いとそこから生じる意味指示作用の違いを分析した。

この詩が創作時に手稿の回覧により読まれ、またその内容が極めてアンビバレントであったことは、ある意味で当然である。詩は当時、依然として一部の階級的・知的エリートたちのものであり、彼が詩人として身を立てようとするならば、ルネサンスから続く豊かな英詩の伝統を受け継ぐ王党派の詩人たちをまず唸らせる必要があったし、また、彼が権力の中枢に潜り込もうという野心を抱いていたとすれば、同時に彼は、新たに権力の座を手にしようとしているクロムウェルに対して影響力をもつ（たとえば Thomas Fairfax のような）穏健派の教養人にも好印象を与える必要があった。この作品はその政治的旗色においてアンビバレントでなければならず、また、ある程度の選択性をもって回覧される「必要」があったのである。

詩形の分析から明らかになったことは、４行で１連を形作るこの詩の各連に聴かれる「二つの声」（Smith 270）の区別が、手稿版では後半２行の大幅な字下げによってより明瞭であり、前半２行で発せられた言説を後半２行の別人の声が補足しているという印象を印刷版に比べてより強く与えるということである。これにより、この詩は詩人ないしその分身が単独で語っているのではなく、むしろ「世間の声」という匿名性を強化する効果を持つということである。また、句読法や大文字の使用の分析から分かることは、手稿版においては、創作当時の世論において極めてセンシティヴであった言説が、主にその曖昧な統語構造から double meaning に解されうるのに対し、印刷版では手稿版に無かった句点を加えることでそのアンビバレンスを解消し、不特定多数の読者にとってより理解しやすいものになっていること、また、印刷版では語頭の大文字を多用することで、語られる意味内容の主意がグラフィックなかたちで明瞭化されるとともに、例えば Peace と War などの語が、実は相互に複雑な関係性を持つものでありながら二項対立的な概念として単純化されている等のことが明らかになった。

結論的には、回覧を目的とした手稿は、原則的に、想定される読者の階級、教養、政治信条、またリアルタイムで流布している逸話、噂、スキャンダル等を念頭に置いたうえで、読む者の心の琴線（または地雷）のありかを手探りしながら書き進めるため、極めて微妙なバランスの調整が可能であり、王党派と穏健な議会派の両者に詩人としての技量を披露することを試みた Marvell は、おそらく当然のことのようにこの手稿の回覧という手段を取ったのだと推測される。一方、不特定多数の人々を読者として想定する印刷物においては、語り手の単一性、統語構造の明瞭さ、グラフィックな要約性、二項対立的な概念設定といったものが特徴となり、これらの特徴は、出版物として後世に残り、また万人に読まれる可能性があるという前提から生じていると考えられる。なお、出版を意図して書かれる詩のこれらの特徴と、その後出版産業とともに興隆していく風刺というジャンルの関係性は興味深い問題であり、これは今後の研究課題として残った。また、この論考は学術論文として公表した。

（４）（２）との関連において、手稿の回覧と類似した役割を持つ、楽曲にのせて歌われるパフォーマンスとしての詩という問題を考察した。詩を楽曲にのせて歌う慣習は古来のもので、ルネサンス期においても John Dowland などの音楽家が活躍したが、17 世紀に入ると、これに代わり、Henry Lawes などに代表される朗唱（declamation）の形式が流行し始めた。「朗唱」は、歌詞を単音のメロディー・ラインに乗せ、ヴィオラ・ダ・ガンバやリュートで伴奏するものであったが、詩の言葉自体のリズムやイントネーションを活かした楽曲であるため、歌詞が聴き

取りにくいという従来の歌曲の欠点を解消した形式であり、その意味で、歌詞である詩の言語の意味とその芸術性がより直接的に伝わるものであった。そのような朗唱歌曲の第一人者であった作曲家 Henry Lawes は、チャールズⅠ世の宮廷楽師として活躍し、James Shirley、Thomas Carew、Robert Herrick、William Davenant、Richard Lovelace、John Suckling 等の詩人たちの詩に楽曲を提供した（Spink 6-50）。この時代の詩人にとって、詩の公表は基本的に手稿の回覧によるものであったが、それに加え、宮廷等で催される音楽会や仮面劇で「歌われる」こともまた彼らの詩の重要な公表手段であった。手稿の回覧は一部の上流階級の読者を想定していたが、歌われる詩もまた、宮廷や貴族の屋敷に招かれるような特定の聴衆を想定して書かれるという意味で、回覧文化の一翼をなしていたとみることができる。また、Lawes は、共和制期に入っても自宅での音楽サロンを継続したが、それもまた、王党派文学サークルにおける詩の回覧と同様、失われた宮廷文化の継承に貢献したと言える。ただ、Lawes の活動は、宮廷文化を継承し、それにより共和制下での王党派の結束を図るという意味では政治的な行為であったと言えるが、歌曲の歌詞そのものが明確な政治的メッセージを発しているわけではない。このため、彼の音楽サークルもまた、Katherine Philips の文学サークルと同様、政治イデオロギーのベクトルと文化イデオロギーのベクトルの両者を持つものであり、過去の豊饒な宮廷文化の存続を図る彼の行為は、その文学文化の享受者の政治イデオロギーとは無関係に、多くの教養人たちにアピールしたと考えられる。たとえば、Lawes は 1634 年に John Milton の仮面劇 *Comus* に楽曲を提供したが、Trudel は、彼とこの議会派の論客が、内乱による政治的分断の後も交流を続けていた可能性が十分にあると指摘している（174）。詩の回覧と音楽サロンにおけるパフォーマンスはともに宮廷文化に源を持ち、それゆえ、国王の処刑とそれに続いた共和制の時期には、その詩や歌詞の内容とはほぼ無関係に、王政主義の復活という政治イデオロギーに結びつくことになった。ただ、当時の文学文化そのものが王政主義と共和主義に二極化しており、回覧文化は前者の独占物であったかのように見做すのは早計である。McDowell は Andrew Marvell が Thomas Stanley の古典主義的文学サークルに属しており、そのメンバーには王党派のみならず議会派の John Hall のような人物も含まれていた可能性を指摘している（1-12）。それが事実かどうかは推測の域を出ない。ただ、全体的に見れば、17 世紀の回覧文化は、さまざまな政治イデオロギーをもつ人々を緩く結びつけながらひとつの文化イデオロギーとして存在していたと考えるべきであり、それが徐々に出版文化というまた新たな文化イデオロギーへと移行していったというのが本研究の結論である。この研究結果は追って学術論文として公表予定である。

＜引用文献＞

Cartwright, William. *Comedies, Tragicomedies with Other Poems*, 1651.

Marvell, Andrew. “An Horatian Ode upon Cromwells return from Ireland.” Bodleian Libraries MS Eng. Poet d. 49.

----------. *Miscellaneous Poems*. British Library C.59.1.8, 1681.

----------. *The Poems of Andrew Marvell*. Edited by Nigel Smith. Pearson Education, 2003.

McDowell, Nicholas. *Poetry and Allegiance in the English Civil Wars: Marvell and the Cause of Wit*. Oxford UP, 2008.

Spink, Ian. *Henry Lawes: Cavalier Songwriter.* Oxford UP, 2000.

Thomas, Patrick. *Katherine Philips (‘Orinda’)*. Univ. of Wales Press, 1988.

Trudel, Scott A. *Unwritten Poetry: Song Performance and Media in Early Modern England*. Oxford UP, 2019.

Wilcher, Robert. *The Writing of Royalism 1628-1660*. Cambridge UP, 2001.

Woudhuysen, H. R. *Sir Philip Sidney and the Circulation of Manuscripts 1558-1640*. 1996. Oxford UP, 2003.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 松崎　毅	４．巻 16
２．論文標題 マーヴェルと回覧文化―手稿版「ホラティウス風頌歌」についての覚書	５．発行年 2020年
３．雑誌名 お茶の水女子大学人文科学研究	６．最初と最後の頁 93-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関